

平成 28 年 後援会(三者共催)講演会 参加報告

齋藤 幸雄氏東北大学 教育・学生支援部 特任教授 演題『災間を生きる君たちへ ～震災の教訓と教育の力～』

平成 28 年 9 月 16 日金曜日、諏訪二葉高等学校の小体育館は全校生徒の溢れんばかりの若さとエネルギーでミストサウナのような状態でした。しかし、小池良彦校長先生の「幸せですか。」という問いから始まり、今世界で起きている戦火の地が日本とは無関係ではないことを示唆し、3.11 の時に宮城県西巻高校で教頭先生をなされていた齋藤幸雄先生のご紹介で閉めたご挨拶は、生徒達の背中の汗を思案のそれに変えました。

続いて竹花会長の挨拶です。竹花会長は、齋藤先生がお書きになった『避難所としての一か月半の地域社会への責務を完遂』の読後を、齋藤先生の果敢な判断力と使命感への感動と、この国の未来を作っていく災間を生きる「生徒たちへの大きな指針」とにまとめて、齋藤先生の偉業を紹介しました。

小池校長の「幸せですか。」の問いと、竹花会長の「生徒たちへの大きな指針」は、本日の講和の総括となるのです。

小池校長先生と竹花会長の挨拶で、講和をしっかりと拝聴する空気になった生徒たちに、齋藤先生は、「結論の話はできません。自分の事のように考えてください。災間とは、3.11 から次の災害のことなのです。」と静かに語りかけ本編に入りました。

I.大人の経験知と判断 ～正常性バイアス・楽観バイアスと愛他行動～

なぜ、判断を間違えたか。それは、「50 年前は大丈夫だった。」というおとなの経験値と、「まさかねえ。」の声が動画に残る『楽観バイアス』である、と齋藤先生は教えてくださいます。動画には、本能的に人は水のそばにはいかなはずなのに逃げようとしない人々、水が足元まで来てからやっとうろたえる人々、と経験知と楽観バイアスの実際が記録されていました。動画と共に、「たったの 4、5 秒で…」「洗濯機の渦中の様に…」「4 km 先で見つかった子どもの遺体は首が無くカモメが…」「自分は明日生きていないかもしれないと記され

た子どものメモ」…、淡々と齋籐先生の説明が続きます。ご自身の消えない悼みは「教え子を無くし、時間は止まったまま」と短く語ります。

必死で逃げて助かった教諭は長野県の津波を知らない青年であり、逃げなかったのはベテラン教諭たち、大人の経験では救えないと繰り返される経験知の事実。

一方で、そんな災害の恐怖と同時に、誰もが自分の死に直面しながらも他を思ってしまう愛他行動を持ち、それが人を苦しめることも知りました。自分も渦中に飲み込まれつつ、目の前で手を伸ばしながら津波に飲み込まれていったおじさんを思い、なおかつ、そのおじさんの遺体に出会ってしまった少年は、ずっとその思いを抱えこみ語れない日々を過ごしたそうです。災害当時、『災害は『てんでに（自分のことは自分一人で）』と教えられたことを思い出しました。しかし、人を助けられなかった痛みを深く抱えてしまう人の性があるのです。

身内も家も職場も無くし避難所生活を送っている生徒、家族全員無事で家もある生徒、そして、目の前で津波に飲み込まれる命を見た生徒、様々な事情の生徒たちが一緒に過ごす教室で、「語れない」「語らない」「聞かない」、当時の生徒たちはこうして時を過ごしていったのです。

本来ならば人々の暮らしを導くはずの経験知がなぜ生かされないのか、それは誰もが痛感している異常気象であると、津波から鬼怒川決壊へとお話は進みます。加えて、川の流れを変えた人知の結果生まれた荒川の下には、たくさんの人々が住んでいるという事実は、首都圏水没の想定を現実近づけます。東京中央防災会議では、100万人の東京住民をいかに埼玉に逃がすかと、こんな時代なのです。

「災間とは、リンゴの産地の長野県がミカンの産地になることだよ。」「大人たちは目の前の生活をするのに精いっぱいなんだ。」「では、誰が考えるの、君たちだよ。」と齋籐先生は生徒たちに語りかけ、二葉の2年生が委員長となって開催している<中高生防災フォーラム>へと、この章を結びました。

II.避難所運営の実際

～水と食料.正確な情報.人間の声～

「言うことを聴かないお年寄りが、大人より子ども声で並ぶ」阪神大震災の

エピソードが、この章の始まりでした。体育館が避難所となった石巻西高等学校は、防災拠点指定避難校でなかったにもかかわらず命からがら飛び込んできた人々でいっぱいになり、避難所として多い時には 390 人が集まり助け合っ
て過ごしたのです。

齋籐先生の『～判断力と使命感が子供たちの命を左右する～防災の心構え』には、齋籐先生と教職員の皆様が、一丸となって、水と食料を確保し食事班や清掃班等の役割分担をし、なおかつ、本来の学校再開へと突き進むのです。教職員も被災者であり、その上、遺体安置所となった体育館で変わり果てた教え子と再会するという出来事もありながら。

そんな中、野球部の生徒たちが「キャッチボールをしたい」と申し出たそうです。声を出さずに静かにという約束で始めた生徒たちが思わず、元気な声を出してしまった時、何と避難生活中の大人たちが「がんばれ」と声をかけてくれたというのです。まさに、「子どもや若人の声には人を元気にする力がある」のです。

そんな避難所ですが、体育館では、遺体安置所として右半分はご遺体がおられ、左半分は食事所となっています。クロロホルムと炊き出しの香りが混在している生活の中、ご自身も身近な方の死にいくつも直面し、「生と死の境目が分からなくなる」と齋籐先生は回顧します。

さらに、「苦しいのは、それからなのです。目標を無くし、若者の自殺がどんどん増えてしまうのです。」

と衝撃の事実を教えてください。こんな状態からいったい人はどうやって立ち上がるのでしょうか。

Ⅲ.学校再開と心のケア

～ASD.PTSD. PTG～

ASD(急性ストレス障害).PTSD(心的外傷性ストレス障害)は、津波の映像が震災当初は何の躊躇もなく何度も流れ、しばらくたってから、「起こりうるの
でご注意ください。」という内容の注意書きと共に周知されるようになった記憶があります。また、実際、その症状で今も苦しんでいらっしゃる方々の情報は多くあります。しかし、PTGはどのように実現したのでしょうか。

「カウンセリングはここからなのです。」と PTG(外傷後成長)の心の症状につなげ、「絶望の後でも人は成長する。』と、一遍の生徒の詩を紹介するのです。どんな注釈よりも直に心を打たれるその言葉の数々をそのまま引用いたします。

潮の匂いは。

片岡侑佳

潮の匂いは世界の終わりを連れてきた。僕の故郷はあの日波にさらわれて、今はもうかつての面影を無くしてしまった。引き波とともに僕の中の思い出も、沖のはるか彼方まで持っていかれてしまったようで、もう朧気にすら故郷の様相を思い出すことはできない。

潮の匂いは友の死を連れてきた。その海に身を削がれながら君は最後に何を思ったのだろう。笑顔の遺影の口元からのぞく八重歯に、夏の日青い空の下でくだらない話をして笑いあったことを思い出して、どうしようもなく泣きたくなる。もう一度だけ君に会いたい。くだらない話をしてもう一度だけ笑いあって、サヨナラを、言いたい。

潮の匂いは少し大人の僕を連れてきた。諦めること、我慢すること、全部まとめて飲み込んで笑う。ひきつった笑顔と、疲れて丸まった背中。諦めた。我慢した。“頑張れ”にたえようとして、丸まった背中にそんな気力がないことに気付く。どうしたらいいのかが、わからなかった。

潮の匂いは一人の世界を連れてきた。無責任な言葉。否定される僕たちの世界。生きることを否定されているのと、同じかもしれない。誰も助けてはくれないんだと思った。自分の事しか見えない誰かは響きだけあたたかい言葉で僕たちの心を深く抉る。“絆”と言いながら、見えない恐怖を僕たちだけで処理するように、遠回しで言う。“未来”は僕たちには程遠く、“頑張れ”は何よりも重い。お前は誰とも繋がっていない、一人で勝手に生きると、何処かの誰かが遠回しに言っている。一人で生きる世界は、あの日の海よりもきっと、ずっと冷たい。

潮の匂いは始まりだった。

潮の匂いは生だった。

潮の匂いは終わりになった。

潮の匂いは死になった。

潮の匂いは幼いあの日だった。

潮の匂いは優しい世界だった。

潮の匂いは少し大人の今になった。

潮の匂いは孤独な世界になった。

潮の匂いは。

記録者は、この詩を打ちながら、何度も手が止まり、今後折あるごとにこの詩を読み直そうと思いました。被災地に送られてくる支援の様々に教師としては書いてほしいお礼の手紙、「書けないよ」という生徒「頑張っているところを見せたい」という言葉に「言えないし、親も死んだし。」という生徒。齋藤先生は、とうとう生徒たちに告白します。

「僕は今笑えません。やれるだけはやります。先生たちも一生懸命です。でももう、先生はあてにしないでください。生徒たち同士で力を合わせてください。だてるのは生徒同士。先生を育てるのも生徒。先生も被害者なのです。あなたたちが前を向いて頑張っていれば、先生も頑張れるのです。」
「生徒たちが前に進む力があると信じて言ってしまったのです。」と齋藤先

生は独白します。

そして、1年後の文化祭、齋籐先生の言葉が生徒たちに届いた結果が表れます。それは、全校生徒たちの笑顔をつなげたモザイクアート『象徴的存在、校長先生の顔』でした。発案者の女生徒さんは、

「誰が見ても感じて明るい気持ちになれるもの、前を向いて一步ずつ強く歩き出そうというきっかけになることができるもの、振り返ってみたときに、良い思い出としてみんなの記憶に残せるようなインパクトのあるものと考え、多くの生徒に関心を持ってもらうために、SNS サービスとタブレット端末のアプリケーションを用いました。制作をしていくうちに学年を超えた中で互いが互いの意見や心情を言えるような関係となり校内がより活性化しました。心が動いて人が動く瞬間を体験することができ、…」と述べています。齋籐先生はその女生徒に文化祭の閉会式、「啐啄同時」という色紙を送りました。

さらに、その後の交流での後輩たちへの女生徒の言葉は、齋籐先生の言う『ひとつ上をめざす姿』なのです。

「自分の思っていることを大切にしながら目に見えるような形にしていてもらいたい。西高のひとり一人が、どんな小さなことでも情報を発信していけば、西高はもっともっと発展していくはずです。」

生徒が学校を変えたこの出来事です。齋籐先生は言います。

「僕の宝物です。どん底の悲しみ絶望を乗り越える力は経験のない若い君たちの方が強い」

「君たち」と呼びかけられた二葉の生徒たちは何を受け取ったでしょう。その後紹介されました、厳しい状況下で全国優勝を果たした弓道部の約束『陰口を言うのはやめよう』『大きい声で校歌を歌おう』が、講演のエンディングに繋がります。

『恩返しをしよう』の発想で広がる部活の成果の数々やネットのダンスビデオメッセージを紹介する齋籐先生は何とも言えず嬉しそうでした。壮行式では、生徒が

「校歌を歌えることが嬉しい」

と大きな声で歌います。あの遺体安置所であった体育館で、誰かが真ん中に出てジャンプをし、皆を巻き込んで円陣を組んでいつまでもジャンプします。校舎からあふれる歌声、こうして『大きな声で校歌を歌う』ことと悲しみを乗り越える力を生む声の力の意味が繋がるのです。

IV. 震災を語り継ぐ

～被災地から未災地へ～

「人間は、必要とされると勇気を持つ。このクラス、部活にいる場所がある
と思うと頑張れる。人は、一生に一度おまえでなければという人に出会う。
その人のためには、頑張れる」

と齋籐先生は説き、諏訪市の子ども達との交流に続きました。諏訪市の小中
学生は当時様々な支援をし
たのです。

豊田小の子ども達は、ミヤコガネというという被災地のもち米の品種でコ
メ作りをし、『ミヤコガネ
物語』という紙芝居を作りビデオを送っています。「小学生の心にも火が付
いた。」と齋籐先生は言って
くださいました。

そんな応援に応え、慰霊碑の前で校歌を歌う大川小の子ども達の姿があり
ました。また、被災地の生徒たちが自分たちで建設しようとする建設物のレ
ンガに『次世代の子ども達のために頑張ってください。』とメッセージを込
めています。それはつまり、このメッセージが見える時は次の災害である。
だからどうか見えないで欲しいと願っているのです。

宝塚東高等学校の生徒たちは『花は咲く』をワンフレーズずつ歌いつなが
った心を発信していました。

「繋がらないとダメ、君たちが繋がらないと苦しいことを乗り越えられな
い。」

齋籐先生は訴えます。

そして、I章で語られたあの少年が、『16歳の語り部』となり、あの出来
事を語り継いでいることを教えてくださいました。

VI.教育の力とは何か

～思いをカタチにする～

～財を残すことは二の次～

「生徒を育てるのは誰？」

と大きな声で答えを求める齋籐先生に、初めは遠慮していた、控えめな二
葉の生徒たち。しかし、

「教師を育てるのは誰？」

「二葉の高校を作っていくのは誰？」

問いが進むにつれ「生徒」「生徒」と会場の声がかんたん大きくなっていきま
した。そんな二葉の生徒たちに

「自信を無くしている人、自分のいる意味を見つけようと焦ってもダメ。行こ
う行こうと焦ると逃げる。いつか自分を必要としてくれる人のために、今自
分の周り、目の前のことを懸命にやろう。きっと役に立つことがある。希望
をもっていれば悲しみを乗り越える力が湧いてくる。」

力強く訴え続ける齋籐先生。こんなに精力的に語る齋籐先生も
「もう講演を辞めようか。」
と思ったことがあったそうです。そんな先生を励ましたのは、
「自分の家なんか直したって何にも育たない。これから何を伝えていくのか。
人間を作るのは教育だ。子ども達にお金を使って欲しい。」
と津波でボロボロになった自宅で語る被災者の声と、亡くなった教え子たち
です。

「お別れに校歌を歌って欲しい。」
齋籐先生にお願いされた二葉の生徒たち。
「さあ、ステージに上がって、校歌を歌えるのは当たり前ではないよ。」
大きな声で誘う齋籐先生の言葉に、控えめながら徐々にステージに上がった二
葉の子ども達。
「先生はどうだ。」
の声にも応えた先生方、その後、体育館が震えんばかりに大きな声で歌った会
場の二葉生の背中には、決
意の汗が光っていました。

PTA 会長さんはお礼の言葉でこのように感動をおっしゃいました。
「言葉を考えていましたが、今の歌声でみんな吹っ飛んでしまいました。」
そのお言葉通り、齋籐先生と二葉生の校歌の歌声に『幸せをつかむための生き
る指針』を頂き、会場を後にしました。

齋籐先生が二葉の生徒たちに繰り返し訴えていたメッセージを記します。

「一つ上」をめざす

生徒を育てるのは生徒である:生徒と同士が高めあうとホンモノの友情が生まれる。
教師を育てるのも生徒である:生徒が前向きになるほど教師は燃えるものである。
学校をつくるのは生徒である:自分の考えを実践する生徒が多いと学校は変わる。

教育の力とは何か

人間は、自分が必要な存在だと実感できた時に幸せを感じる。
人間は、自分が決して独りでないと実感できた時に安心する。
人間は、誰かとつながっていると共感できた時に意味を知る。

記録 小林 佐江